

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00922

研究課題名(和文) 歴史的環境から見た明清農書の研究

研究課題名(英文) Studying the Ming Qing Agricultural Book analysed based on the natural environment.

研究代表者

大川 裕子 (Okawa, Yuko)

上智大学・文学部・准教授

研究者番号：70609073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、耕地の立地を県レベル、村レベルで特定することが可能な明清時代の農書を取り上げ、できる限り実態に即して理解することで、農業技術の継承と変容の過程、自然環境との関わり、「農書」として括られてきた書物の性格について分析した。とくに清代に記された三冊の農書を取り上げ、研究会での農書講読と検討を重ね、日本での雑穀栽培調査から得た知見を活用しつつ詳細な注釈を付した日本語訳を作成した。精読を通じて、農書には生産技術以外に、占い・調理・水利・備荒など多様な情報が盛り込まれていることを再確認した。最終年度には国際シンポジウムを開催し日本・中国・韓国の農書専門家を集めて学術交流を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

農書には生産技術以外の多様な情報が盛り込まれていることを再確認し、農書が農業史研究以外の分野研究に活用できる可能性を指摘した。現在、中国農業史研究に携わる研究者は少ない。その理由の一つに「農書」の扱いにくさがある。本研究では、農書の内容を分析し詳細な注釈を付した日本語訳を複数発表した。これにより中国研究者以外の人々が中国の前近代「農書」の内容に触れることが可能となった。最終年度に開催した国際シンポジウムでは日本・中国・韓国の農書専門家を集めて学術交流を行い、農書のあり方を確認するとともに、今後の研究課題について意見交換を行った。以上の活動は今後の東アジア農業史研究にとって重要な意味をもつ。

研究成果の概要(英文)：A large number of agricultural books have been left in China. In this study we have carefully read and translated several traditional agricultural books describing the agricultural conditions in southern and northern China during the Ming and Qing dynasties, and have published papers on them. In the final year, we held the seminar with agricultural book researchers from Japan, China, and Korea to confirm the nature of agricultural books and to exchange views on future research topics. Traditionally, agricultural books are usually used as readings on production techniques and productivity, but the books categorized as agricultural books include a wide range of topics such as meteorology, divination, medicine, and cooking, in addition to production techniques. Through this study, we were able to "rediscover" the diversity of agricultural books and their potential for future applications in fields other than agricultural history.

研究分野：中国史

キーワード：農書 農業史 環境史 明清農書

1. 研究開始当初の背景

中国において古来より生み出されてきた農業知識は、国家や知識人の手により農書という形に残され継承されてきた。農書は生産技術の発展を考察するための格好の史料であることはもちろん、前近代の人々がどのように環境を捉え、自然に働きかけてきたかを知り得る最も実質的な史料でもある。復元書を含む現存の農書は、漢代（前1世紀）以降二百種を越えているが、とくに明代末期～清代（16～19世紀）になると農業経営者が自身の所有する農地の生産状況と、自己の農業の経験を子孫に伝えるために農書を記すようになる。これら明清農書に記される農業経営は実在したものであり、記載内容も経営・技術の現実に及んでいる。加えて、農書に記される耕地の立地を県レベル、村レベルで特定することも可能である。農地を特定できれば、現地に今も残る農業慣習や方言を調査し、そこから得られた知見を農書の内容把握に活用することも可能となる。このような問題意識のもと、本研究課題では明清農書に記された伝統農業の詳細について、現地調査をふまえて現実の状況に則しえ考察することを目標に掲げた。

2. 研究の目的

伝統中国においては農業生産と国家政策、政治思想とが深く結びついた「農本主義」が生み出され、この理念の影響は当然ながら農書にも及んだ。そのため農書から、歴史上の農業とそれを取りまく社会状況について読み解こうとする場合、農書の記載と農業の実態との関係についても注意を払う必要がある。本研究は中国の伝統農業の実態を、農書が書かれた地域の地勢・水資源・土壌などの環境や農業技術を把握し、現地の状況に即して新たに読み解くことを目的とする。具体的には明末～清代に記された農書の分析を通して中国伝統農業の実態を検討し、農業技術の継承と変容の過程、自然環境との関わり、「農書」として括られてきた書物の性格を解明することにある。本研究で取り上げる明清農書は、中国ひいては東アジアにおける伝統農業の詳細を現実の状況に則して理解することが可能な貴重な史料である。

3. 研究の方法

復元書を含む現存の農書は、漢代（前1世紀）以降二百種を越えているが、本研究では清代に記された三冊の農書を考察対象に設定し、研究会での講読と検討を重ね、詳細な注釈を付した日本語訳を作成した（研究会メンバーは分担者の大澤正昭・井黒忍、研究協力者の村上陽子他）。中国では地域の自然環境の違いにより栽培される作物が異なるため、南の稲作地帯、北の畑作地帯の特色を把握できる農書を選定する必要があるが、本研究では①長江下流低湿地の稲作農業の状況を記した『浦柳農咨』（清・道光年間）②黄土高原の雑穀栽培の状況を記した『農言著実』（清・道光年間）および『馬首農言』（清・道光年間）を取り上げた。

以上三冊の農書はいずれも、少なくとも県レベルでの農地の特定が可能である。農書にはその土地で使い続けられてきた慣用語や方言、さらに地域特有の農業技術・農業事情が盛り込まれており、難解な部分が多いのだが、現地に今も残る農業慣習や方言を調査することで、そこから得られた知見を活用して農書の内容把握の一助とすることが可能となる。本研究では、農書が記された現地で調査を行い明清農書の内容を正確に把握する予定であったが、COVID-19 感染拡大とその後の混乱の影響で、中国で調査を行う機会を得ることができなかった。そこで、調査対象を日本国内に移し、現在でも伝統農法を保持しつつ雑穀栽培を続けている徳島県美馬郡つるぎ町を訪問し、傾斜地におけるソバ・アワ・シコビエなどの栽培方法について調査した。この調査を通じて、土地ごとの自然環境に応じた栽培作物の選定、農具の種類、調理法などについて情報収集を行い、華北の雑穀栽培を考える際の参考にすることができた。また、長江下流域については1940年代に行われた満鉄の農村慣行調査（南満洲鉄道株式会社編『江蘇省松江県農村慣行調査記録』）に残される情報（田植え方・慣用語・農具など）が『浦柳農咨』の理解に役立つことに注目し活用した。

4. 研究成果

(1) 農書訳注

以下の農書について詳細な注釈を付した日本語訳を『上智史学』65～68号（2020～2023年）に発表した。

①『浦柳農咨』：姜皋が19世紀前半における松江府華亭県の稲作農業について述べた書である。姜皋は自序において、自身は農地を持たず農業にも携わっていないが、農事に興味を持っており困窮する農民の言に耳を傾け記録し、その原因をさぐるために本書を筆記したと述べている。18世紀の好況期から一転して、『浦柳農咨』が印行された道光年間（1820～1850）は不況期であった。四十条に及ぶ本文には、土壌・水利・天候などの地理的な状況と、播種・秧田・除草・収穫・施肥・耕牛・農具に関する稲作生産技術、さらに民が負担する賦税額や生産に関わる経費が具体的に記されている。本書は低湿地の稲作農業の実態をうかがうための貴重な史料である。また、社会経済の側面においては、当時の物価や、江南デルタにおける商業的農業の深化を具体的に知りうる史料である。

農書全編の分析を通じて、松江府では東郷（微高地）・西郷（低湿地）という二分類の他に、微妙な高低差に応じた土地の区分が常態化していることが明らかになった。具体的には、低湿な西郷内部には秋・冬期の排水ができないため晩稲あるいは中稲の一年一毛作を行う低湿地と、秋・冬期には水を抜き早稲と春作物の栽培が可能な二毛作地の二種類の耕地が存在した。太湖沿岸部においては、微妙な地形の高低差が、排水の問題と密接に関連して農業経営に影響を及ぼすことは、既に訳出した『沈氏農書』『補農書』の事例からも確認している。微地形に応じてどのような作物が栽培されていたのかについては、個別論文において分析を行っている[大川2021]。

『浦柳農咨』は、19 世紀前半における太湖東岸低湿地帯の農業の実情を把握する上で有益な史料なのである [大澤 2020]。

②『農言著実』：楊秀元が陝西省三原県における地主経営の要諦を子孫に伝えようと記した遺訓である。三原県北東に位置する、ひとつの農業経営に限定された記述ではあるが、三原県の黄土原上と原下（平原）に展開する所有地の自然環境や経営様式などが具体的かつ率直に述べられ関中黄土地帯における農業経営の現実を理解するために重要な書である。本農書については 2016 年に現地調査を経て訳注を發表しているが、その際、利用できる版本が限られており、通常の史料訳注には必須の、史料原文の校訂を提示することができなかつた。また秦晋農言本を底本とした校注を付けたものの、大まかなものにならざるを得なかつた。その後、2019 年に陝西農林科学技術大学において原刊本などの必要な版本に目を通す機会が得られ、閲覧したテキストをふまえ、文字の校訂を行い、あらたな訳注を完成させた。

③『馬首農言』：寿陽県平舒村出身の祁雋（寓）藻（1793～1866）が、山西省寿陽県一帯の農業活動についてまとめた書物であり、記載内容は半乾燥地帯における雑穀（アワ・キビ）・蔬菜類の栽培と農具、牧畜・養蚕業などに及びんでいる。祁雋（寓）藻は寿陽県平舒村の出身で、祁家は多くの科挙官僚を輩出した名望一族であった。祁雋藻自身は嘉慶 19 年、22 歳の時に進士に及第し要職を歴任し、道光・咸豊・同治の三帝に仕えた大官僚であったが、道光 14 年（1834）～16 年（1836）夏まで故郷の寿陽県で母の喪に服し、「ただ農事だけを務めとした」（自序）。『馬首農言』はこの間に記された。14 篇からなる本書の内容は農業生産に関連する部分（地勢気候・種植・農器・五穀病・水利・畜牧）、農業をとりまく風俗習慣や経済に関する部分（農諺・占驗・方言・糧價物價・備荒・織事）、農業と無関係の寿陽の人物・文藝・習俗に焦点を当てた部分（祠祀・雑説）に三大別することができる。「農言」がタイトルとなっているため、本書はこれまで農書として把握されてきたが、全編を精読すると、祁雋藻の本書編纂の目的が農業を含めた寿陽の歴史を記録に留め、故郷のすばらしさを世に知らしめることであったことが明らかとなる。

とはいえ、『馬首農言』には寿陽県の自然環境と農業について具体的な記載も見られ、19 世紀半ばにおける華北黄土地帯の農業の一端を伺うことができる貴重な史料である。太行山脈の裾野に位置する寿陽県はとりわけ冬の寒さが厳しく、穀雨を過ぎないと播種することができず、「農事の苦難は他邑の倍」であった。農地については地形の異なる「原（黄土原上の乾いた耕地）」と「隰（河川沿いの湿り気のある土地）」という二種類の土地があり、「種植」では度々両者が対比されて、犁溝の深さ・播種時期・播種量の違いが述べられている。陝西三原県の農業を記した『農言著実』においても、耕地は「原上」「平川」に分けられ、農作業の手順の違いなどについて細かく記載されていた。黄土地帯を耕す人々にとって、黄土原上と平地の農地とは自然条件の面で大きな差異があるため、両者の特性は当然把握すべきものであった。また、黄土原の崖地に掘られた窯洞（ヤオトン）を活用して長期間の穀物保存を行うべきだとする現地ならではの状況も紹介されている。祁雋藻はこのような農業の情報を、「最初に邑人の張耀垣から農業事情を聞き、学友の冀乾と照らしあわせ、老農にも質問して裏付けをとった」（「種植」第 10 条）と述べている。

以上、いずれの農書も全編和訳した最初の試みであり、明清農書を中国史研究者以外の人々が利用しやすい形にして発表できたことは意義がある。農書には現在の我々が考える農業生産技術のみならず多様な要素が含まれている。具体的な農書訳注作業を通じて、農書の特色を明らかにすることができた。

（2）研究論文

農書の精読を通じて、主要穀物栽培以外にも自然条件に応じて多様な作物が栽培され、複合的な生産が行われていたことを再確認した。『浦柳農咨』の農地が立地する長江下流低湿地に暮らす農民は、稲を主要穀物として栽培しつつ、排水不良の低湿空間を有効利用して水生植物の栽培を行い食糧として日常的に利用し続けていた [大川 2021]。主要穀物が不足した場合に備えてどのような対策をとるのか、何を食糧として選択するのかは人類の歴史における重要な問題である。歴史学研究においては重視されてこなかった野生植物の利用や半栽培についても、実は農書では言及されており、農書のもつ「危機回避」の側面についても新たに確認することが出来た [大川 2023]。その他、農業において養蚕が果たした役割とその変遷 [大澤 2022]、農書に記された水利灌漑の問題についても考察を加えた [井黒 2024]。

（3）シンポジウムの開催

2023 年 9 月 16 日に上智大学においてシンポジウム「農書から見る中国—農業技術・自然環境・生活文化—」を開催した。シンポジウムでは、中国・華南農業大学の周晴氏より「明清時代太湖南岸の農書に反映された桑園管理技術と水土環境」、韓国・釜山大学の崔徳卿氏より「中国古農書における度量衡の変遷と受容」、中国・陝西師範大学の李令福氏より『農言著実』が記載する農作物の輪作形式とその意義について報告いただいた。国内からは小野恭一氏（鹿児島県埋蔵文化財調査センター）より『成形図説』に見る中国農書の農業技術、井黒忍氏（大谷大学）より『知本提綱』に見る灌漑の技術とその認識を報告いただいた。日本・中国・韓国の農業史研究者が一同に会して、「農書」の可能性を検討し相互交流を深める機会を設定することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 大川裕子;村上陽子;大澤正昭	4. 巻 65号
2. 論文標題 「『浦ボウ農咨』試釈」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『上智史学』	6. 最初と最後の頁 63-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大川裕子;村上陽子;大澤正昭	4. 巻 66号
2. 論文標題 「『農言著実』テキスト研究」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『上智史学』	6. 最初と最後の頁 35~70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大澤正昭・村上陽子・丸橋千加子・井黒忍・大川裕子	4. 巻 67号
2. 論文標題 「『馬首農言』試釈その一：地勢気候・種植一」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『上智史学』	6. 最初と最後の頁 67 ~91 頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大川裕子;村上陽子;井黒忍;大澤正昭	4. 巻 68号
2. 論文標題 「『馬首農言』試釈その二：農器・糧價物價」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『上智史学』	6. 最初と最後の頁 111~137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大川裕子	4. 巻 79
2. 論文標題 「長江下流低湿地における水生植物利用の変遷史」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東洋史研究』	6. 最初と最後の頁 39-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大川裕子	4. 巻 106巻1号
2. 論文標題 「飢えへの備えー中国農書の記す救済と食」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『史林』	6. 最初と最後の頁 1～43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭	4. 巻 65
2. 論文標題 『浦ボウ農咨』から考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『上智史学』	6. 最初と最後の頁 103-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭	4. 巻 12
2. 論文標題 「太湖デルタ地域の 農業危機 宋～清代の農書を題材に 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『唐宋変革研究通讯』	6. 最初と最後の頁 23-47頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤正明	4. 巻 67
2. 論文標題 「唐から明初の栽桑技術：『四時纂要』と通俗農書・日用類書を中心に」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『上智史学』	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井黒忍	4. 巻 29
2. 論文標題 「『知本提綱』に見る灌漑の技術と認識」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『大谷大学史学論究』	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井黒忍	4. 巻 48
2. 論文標題 「晋北における水利会社の設立とその事業」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『中国水利史研究』	6. 最初と最後の頁 122-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井黒 忍 (Iguuro Shinobu) (20387971)	大谷大学・文学部・准教授 (34301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大澤 正昭 (Osawa Masaaki) (30113187)	公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員 (72622)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関